

都市における惣的結合の發展

——特に天文の法華一揆を中心として——

豊田武

【要約】一〇七四年、ドイツのケルンに勃発した市民の大暴動は、富裕商人のグループによつて指導されたコンミュニオン運動の先驅的なものとして知られている。都市がコンミュニオンを確立するためには、都市領主との間に数次にわたる闘争と妥協が必要であつた。わが国においても、十六世紀はこの種の暴動の京都・奈良其他に著しくなつた時期である。ここでは主として京都におこつた天文法華の一揆を取扱い、それが勃発するまでの経過や町衆の役割、一揆の様相や惣的發展との関係などについて述べ、日本におけるコンミュニオン結成の運動の特質について考える一素材としたい。

古代的な都市が封建的な都市に脱皮するためには、何よりもその都市の住民が古代的な隸属関係を離れて独立して行くことが必要である。

鎌倉・室町時代、都市の住民、とくに商工業者は多く神人や供御人の身分をもつものであり、古代的な荘園領主に隸属して、種々の奉仕をなすことを立前としていた。しかし室町も中期以降になると、これらの商工業者はしだいに荘園領主のもとを離れ、或は幕府に属してその政所の公人や侍所の小舎人雑色などになり、或はそのときどきの実力者の家来となつて、營業の保障を得た。このような傾向

は、高利貸者たる土倉・酒屋に著しく、応仁乱後、洛中洛外の業者は、しだいに山門の支配を離れ、土蔵法師といわれた身分から、俗体の業者にと變化して行つた。拙著日本商人史

一方、地子銭の請負いや自衛の必要から、都市住民の間に自治の氣運が見られ、惣的結合の傾向が著しくなつて来たが、このような情勢のうちに都市の住民はしだいにその自立的結合を強め、都市の領主との戦いのうちにその自由を確保して行つた。神宮の門前町宇治山田における神人对神役人の争いはそれであり、奈良では、天文一揆に富有な町人衆の反抗がみられる。ここではとくに京都の場合

をとりあげ、京都の惣的結合が天文初年の法華一揆を通して、どのように進展して行つたかを、考えて見たい。

一

京都の町が惣町としての実態をととのえはじめたのは、応仁の乱後、幕府の權威がおとろえて、都市の秩序が幕府の手で守りきれなくなつてからである。ことに永正四年六月、管領の細川政元が殺され、そのあと細川氏が争いをこととし、実權が三好氏に移つてからは、京都の政權をめぐつて争いが絶えることがなかつたため、京都の住民も、互に團結して町としての防衛力を強めることが急務となつて来た。この時代となれば、都市の住民の富の力も増大し、領主の支配を排除しようとする傾向がにわかに高まつて来た。

このような傾向をもつともよく示すのが、地下による半済の強行である。半済はもともと室町幕府が論功行賞として、莊園領主の收納すべき年貢の半分を部將にあたえたところに発するが、応仁の乱後、とくに永正・大永のころになると、それぞれの実力者が勝手に半済を強行して、莊園領主を苦しめることが多くなつた。ことに京都やその近郊ではその傾向が著しい。永正元年九月、管領細川政元が板將を淀に改めたとき、部將の香西又六等は、半済を約束して近郷の土民を悉く狩り集め、近郷の土一揆数千人を相從えたが、この

とき下京の衆は、地子の免除を目的としてみな出陣した宣風卿記、後法興院政家記。細川政元はその功として部將に山城・摂津の寺社本所領の半済をあたえることとなり、翌月香西は山城國を申立てて、二年九月まで押してこれを知行、その間半済に反抗した一乗寺・高野・山科郷に発向、山科郷では郷人の抵抗を受けている二水記、後法興院政家記。

ついで享祿二年正月十日には、時の權力者三好元長の一党柳本賢治の手のもの兩人が、一条殿の地へ地子錢をとるために押かけ、妻子まで人質にとつているが當雜記。翌三年十二月廿五日には、同じく木沢長政が正親町の地子を半済にすべき由を三条西実隆のもとに書き送つている実隆公記。

しかしこのように実力者が代る毎にひんばんに地子錢をとられるのでは、町衆もたまるものではない。町衆もその度毎に猛烈な反撃に出た。享祿二年、一条町の場合には、町衆はその集会所たる草堂の鐘をつき鳴らし、ときの声をあげて人質の奪還につとめ、柳本新三郎の衆七八人に傷をつけ、三人を倒した程であつた。

この時代ともなれば、町衆もそれぞれに團結し、武力をもつて土一揆と戦いを交えるほどに成長していた。香西又六が淀に出陣したとき、下京の衆が地子の免除を目的としてこれに参加したというのも、部將たちが武力集団としての下京衆を高く評價していたためであり、この勢いが進めば、彼ら自身、半済の強行、年貢の免除に向つて、

その実力を発動するのは、当然のことである。この前後になると、

京都の近郊到るところで、郷民たちが年貢半済のために、郷村連合をなして、氣勢をあげている。明応頃と思われる上久世庄沙汰人連

署の注進状に、西岡中脈諸郷の一揆等が半済と称して上久世庄に触

れて来たことが見える東寺百合文書。永正八年の秋には、京都近辺に土一

揆が蜂起して月余に及んでいるが公認、その十一月には、勸修寺領

山城宇治郷十一ヶ郷と山科七郷内所々散在の地下人等が、半済と号して年貢を滞納、幕府は大内氏にその取りしまりかたを命じている。

ところが同十七年十月にも、勸修寺境内ならびに醍醐小栗栖石田小野等の郷民が散在の田畠の年貢を、宇治十一郷の百姓と呼応して、半済の企てをなし、すでに勸修寺八幡宮の祭礼料を半済にした勸修寺文書。

このころになれば、酒屋土倉を襲うというような暴発的な蜂起は比較的少なくなっているが、郷村の連合はいつそう緊密となり、半済の要求等継続的に、また効果的な方法が到るところでおこなわれてをり、それだけ荘園領主としての打撃も大きかったと思われる。

こうした傾向はさらに都市にも波及し、郷村と一体の半済の要求のおこなわれることも珍らしくなくなつた。永正十七年五月には、折からの徳政の騒ぎに便乗して、東寺の境内の連中が一揆し、年貢の半済を企てようとして、張本人のつかまつたこともある廿一口方評定付。

大永五年（？）四月、洛中の等持院は、院領たる西京四町及び七

条朱雀の土地が、「十一ヶ郷之組」と号し、半済年貢等を抑留し、

寺納しないのを訴えている大徳常興日記裏書・村山氏・都市生活の源流。実隆公記大永八年二

月十七日の紙背にはまた次のような文書がある。

洛中洛外半済士民配当由候。此儀者歎入候事候、少下京地子それさへ半済候ては一向事候。

この文書は前後の事情よりして、大永六年十二月ごろの史料と考えられる。あるいは実隆公記十二月三日の条に、「徳政所々取質」とあるに對比される事実かと思われるが、とにかく洛中洛外にわたつて士民が半済を配当するに至つたことは、まことに驚くべき事実だといわねばならない。

二

このような町衆の意気の最高潮に達したのが、天文初年における法華一揆の洛中支配である。洛中にあつては、すでに応仁の乱前から日蓮宗の信者が増大し、応仁二年七月の奥書のある諫曉始末記には中尾親氏の、近頃山門が理不尽に法華一宗を破却すべき風聞があるが、もしそうであれば、京都の半分は法華宗であり、信心の檀那は身命を捨てて防ぐであろうから、洛中にもつての外乱れることであろうということが記されている。後慈眼院殿記明応三十年十月十三日の

条には、「文明の乱以後法華宗京中に充滿す」とあり、天文の頃には、「京都に日蓮宗繁昌して、毎月二ヶ寺、三ヶ寺宛寺院出来し、京中大方題目の巷」となる有様であつた。藤井孝氏引用
昔日北報録とりわけ酒屋土倉の中には、洛中第一の酒屋として知られた柳の酒屋をはじめとして、日蓮宗の信者となるものが多く、蔭涼軒日録文正元年閏二月の記事なども、日蓮宗と酒屋との間に関係のあつたことを推測させる史料である。これらの酒屋土倉は、応仁の乱後土一揆や足輕の襲撃に備えるため、しだいに武裝を強化しはじめた。細倉と号する沢村平左衛門は、明応三年正月には、赤松方と戦い、北野社
引附九年十月には、細川玄蕃守の兵と争つて、細川方の者を若干負傷させている。二水また同四年十月、町人と土藏方衆が土一揆と戦つて数十人を打とつているが、そのときの藏方の大将も沢村すなわち細倉であつた。この沢村の一家と覺しい千松が天文十四年八月十日、本能寺に下京六角附近の土地四町を売渡しているところを見ると、福山、
歷略沢村と本能寺との間に深い関係があつたようである。天文法華の乱のとき、京都の豪商の後藤・本阿弥・茶屋・野本などが日蓮宗の信者として活躍したと推測されるが、彼等は何れも武士的な性格をもつものであり、栗原柳菴の所記にも、「応仁兵乱の後、商人みな潜上して兵士の如く太刀を佩び、弓箭を握り、軍役に従ふこと堺の茶屋・京の茶屋の如し」とある。

六条の本願寺を中心として、本能寺・妙顯寺などの日蓮宗寺院はその拠点であり、とくに堀をめぐらした本願寺の要害は堅く、三好氏もしばしばこを宿所としており、山科の本願寺と対立する一向宗徒と、本願寺を拠点とする日蓮宗徒の争いは、早晚さけられない運命となつていた。

たまたま天文元年六月、細川晴元は、河内飯盛城にこもる木沢長政を援けるため、本願寺の御坊にいた証如に援兵を求めた。証如は、門徒を召集して、飯盛城をかこむ畠山義宣を打ち破り、勢に乗じて、六月義宣の背後勢力なる三好元長を堺の南莊に攻め立て、これを自殺させた。ところが一向一揆はその後ますます勢を振い、奈良にあつても興福寺の焼打をおこなうなど、本願寺の一揆は「諸国に充滿し、天下一揆の世たるべき」有様となつた。二水
記

ここに細川晴元の軍勢もようやく一向一揆と対立をはじめたため、当時一向一揆とならぶ勢のあつた法華宗徒を利用して、一向一揆を抑えようとし、天文元年八月以降、法華宗徒とともに洛中刻るところに一向一揆を攻撃した。たとえば八月七日には、柳本の徒党其外京中の町人等は三四千ばかり、六条本願寺に集り、さかん示威運動を試みた。ついで十五・十六日にも、京勢の一万人以上が打寄せて来た本願寺の衆四・五千と戦いを交えている。京勢は過分に法華宗であつたという。さらに廿三日、細川晴元の部將は法華宗徒と

ともに山科本願寺を四方からかこんだが、このときも京勢三・四万のうち多分は法華衆であり、武士の衆は小勢であつたという。二水。記。

晴元の舅江州の六角定頼や延暦寺の衆徒もこれに協力、廿四日ついに壮麗の殿堂に火を放つてこれを焼きつくした。山科の没落に憤激した一向一揆は京都を襲撃しようとする風聞があつたため、京都は

混乱をきわめ、上京の草堂と下京の六角堂は鐘を打つて不穩を告げ、市民は連日集会を開いた。二水。記。法華宗を中心とする町衆はその後も

一向宗徒の根拠地に対して具を吹き、鐘を突き、ときの声をあげて出陣、戦いは翌年に及んだ。二水。記。是。和季世記。この間、京都も物騒をきわめ、

「昨今法華衆同檣那等諸道具又持運び」、甚だ物騒な様相を呈した。二水。記。

やがて二年三月、木沢長政は、摂津伊丹城の援兵に法華門徒を引きつれて出陣したが、その折の打廻りは、総勢一万ばかり、乗馬四百余騎、ことごとく地下人であり、兵具以下目を驚かすばかりであつたという。二水。記。宗徒たちは、法蓮華經を旗の面に大文字に書き、

さしつれて、城をかこむ一向宗徒を攻めたため、ついにこれを四散させた。是利季。世記。一向一揆に占拠された堺も恢復したので、五月、晴

元衆の三好、木津長政は、廿一箇寺の法華宗徒と一味同心して石山本願寺を攻めたが、容易に摂州第一の名城をおとすことができず、そのうち京の様子があぶなくなつたので、本願寺と和睦して引

上げた。

こうして法華一揆は天文元年八月以降五年七月まで約五ヶ年の間ほぼ洛中洛外の支配権をにぎり、法華衆の黄金時代を築き上げた。

天文五年、山門が法華衆征伐のときに教え上げた罪状の中に、「今般日蓮党京都に充滿し、惡逆を致すこと言語道断の次第である。風聞の如くんば、洛中処々に堀を掘り、ほしいままに公事を裁許し、

下人等をその党に引入れ、諸宗に対して狼籍す」とあり。

日本仏教史
中世篇所収

金剛三昧院所設天
文五年山徒集會議また「今般日蓮党類の働き、惡逆頗る前徒に超えたり。

その間或は公武御願の寺塔を断絶せしめ、或は押して主ある田畠を堀り破り、或は非分の土貢を没収し、或は専ら人を殴き鬭殺、土壇の雑人と相談して、ほしいままに畿内の諸公事を評判す」とある。雨森浩四郎
氏所藏文書

ではなからうか。座中天文物語にはまた、「其比京中に法花宗権柄を執事あり、公方管領之御成敗をもとき、洛中洛外之政道只一向法花宗之まま也」と見え、山門の会議と同様、法華宗が洛中洛外を一時的にも支配していた事実を語っている。同じく座中天文物語によると、「法花宗之諸旦方之中には、衆会之衆として別して権柄をとるもの」があつたというから、この行政は、合議制によつてなされていたものらしい。林屋辰三郎氏の紹介された嵯峨宝幢寺塔頭鹿王院の文書によると、

公方様桑実御座以来日蓮宗時、洛中地子銭依不致沙汰、有名無実とあり、將軍義晴が近江に出奔して桑実寺にあり、「日蓮宗時」すなわち法華一揆が京都を支配していた間、洛中地子銭が惣じて沙汰せられず、天文六年、日蓮宗の退転と共に、諸本所元之の如く返されたということである。このような地子支配の蔭には、さきに享祿三年正親町の地子を半済にした木沢の力が働いていたかも知れない。天文二年三月十六日、日蓮宗は、木沢を通して幕府に対し、本願寺のもつていた宇治郡十一ヶ郷・山科七郷・東山十郷散在一円の支配を申請して来た。幕府も日蓮宗徒に対し負うところが多かつたため、これを許そうとしたが、山科家の反対で実現しなかつた。細野記この事実も日蓮宗の徒が、洛中とはもとより洛外にまで一時的に地子収納の手をのばそうとしたことを語るものではなからうか。

この日蓮宗の徒の勢をふるいはじめた天文元年十二月八日、両宗の徒の争いの間隙に乗じて、土一揆蜂起のことがあり、京中騒動となつたが、京衆土蔵衆上下二万人ばかりは、相率いて土一揆張本の在所たる西京・太秦・北山に向い、その在家に放火した。二水記その京衆土蔵衆の大部分が日蓮宗の徒であることはいうまでもない。翌二年十二月廿五日には、日蓮宗の徒が西辺土すなわち京都の西郊西院・山の中・郡・梅津・河端其外の十一村に放火した。この村もやはり土一揆の根拠地であつたのであろう。富雄記土一揆と土倉を主体

とする町衆との対立はしたいにはげしくなつて来ているが、このように土倉が軍隊を組織して土一揆の根拠地を進んで攻めたてることができるようになったところに、これらを主力とする法華一揆の根強さがある。またこのような法華一揆のさかんなときであるから、土倉の意気もまた大いにあがつていたのであろう。

天文二年六月七日、一向一揆の襲来で京中が不穩であつたとき、祇園の神事を停止したところ、下京六十六ヶ所の月行事等は打揃つて、神事はなくとも、山鉾は渡したいと請願している。祇園執事行日記これは林屋氏や原田氏のよく引用される史料であり、下京町衆の意気をまことによく示している。法華一揆の勢のさかんな蔭に、このような惣町の結成のあつたことを忘れてはならない。

其後、天文二年五月、細川晴元の敵手晴国が丹波より兵を進めて京都を窺はんとしたため、晴元や日蓮宗の徒はその根拠地をつかれることを恐れて、本願寺と和睦したが、その後、晴元の部下の木沢長政が石山を攻めてこれを破つたこともあつた。このようにしてしばらく法華一揆の洛中支配は続いたが、その後法華一揆の勢は、一向一揆の勢に押され気味となつた。ことに法華一揆は、足利季世記に、「三好一家繁昌ノ折ヲ得テ、彼檀那寺法華宗アマリニオゴリ」、云々とあるように、三好の一党の支持によつてその勢を維持していたのであるから、三好元長が攻めほろぼされて以後、その勢がそれ

ほど永続するとは思われない。南都北嶺の日蓮宗迫害はすでにその前からはじまつている。文明二年十二月には、奈良の興福寺衆徒が奈良の法華宗徒を討つてゐるし大衆院等社雜事記、山門も大永四年七月坂本における日蓮の党を追放したことがあつた実録公記。法華一揆の隆昌は、

早晚山門との全面的な衝突を来すことは当然である。天文五年の春、寂山の僧某が京都で法華宗の在家と宗論をたたかわしたのに端を発し、七月山門は諸国末寺檀徒を集めて、京都の法華宗徒の攻撃をはじめた。近江からの入口は悉くとぎされ、米穀輸送の道はふさがれた。戦闘は一時法華宗側に有利に見えたが、六角氏の軍が四条口より攻め入り、火を放つに及んで、ついに法華宗側の寺院はほとんど没落し、最後に残つた本國寺の要害も翌日おちいつた。

ここに日蓮宗の徒は悉く四散し、そのため大多數の僧侶は、堺の末寺に逃げ去り、しばらく京都における日蓮宗徒の勢力は見る影もなくなつた。その後、天文十六年、法華衆徒は条件を付してその帰京を許されたが、日吉の祭礼料として毎年百貫文を納めるなど、全く山門の支配に屈服した形である。

この弾圧は、表向きは山門の日蓮宗退治と見られるが、山門にあつては、日蓮宗であれ、一向宗であれ、山門の支配下にあつた京都を新興勢力のもとに委ねることを見逃すことはできない。法華一揆がかくまで勢力を振へ得たのは、堺と同様、日蓮宗を信する三好の

一党の支持があつたからである。これに対し、近江の六角氏はその勢力を駆逐して京都の実権を握ろうとし、ここに山門を助けて日蓮宗の放逐につとめたのであらう。

法華一揆の力の弱かつたことは、結局都市の町衆の権力がなお荘園領主の勢力を徹底的に排除し得なかつたことを物語るものであらう。この点、一向一揆の鄉村を地盤とした勢力の方がはるかに強かつたといふことができる。法華一揆の社会的地盤を論じて、それが都市において富裕な商工人、農村においては土豪的地持を基盤とする説もあるが、少くとも京都における天文の法華一揆にあつては、史料の上から見て、農村の土豪がこれに協力したとする例は少ないようである。もとよりこの法華一揆の行動が鄉村における半済強行の氣運に相呼応して起されたものであり、法華一揆の主体となる下京の上層町衆、とくに酒屋土倉が京都近郊に多くの土地をもつてゐることは事實であるが、やはりこの一揆は、都市の有力な町人が、封建領主間の対立抗争に引き入れられながら、なお自ら結束して自立の機会を求めて立ち上つたものと考えるべきであり、その都市住民の実力と組織がなお鄉村を圧倒し得なかつたところに敗北に至る事情がひそんでいるのではなからうか。都市の富力が鄉村を圧倒してくるためには、なお都市のいつそその發展をまたねばならぬ。

しかしそうはいつても、この法華一揆の活動の後に及ぼした影響

はきわめて大きい。庄園領主は幸にして、日蓮宗の徒を追放することによつて、寺社本所領の地子をもとに戻すことができた。しかしそれは一時的なことであり、上京及び下京の惣的結合は、この法華一揆を契機としていつそう強化され、地子銭の納入はまったく思わしくなくなった。天文八年室町十御門三福寺地子銭未進により、大館兵庫の中間が催促に行き、六十文とるべきものを法度により一貫二百文出せといったのに対し、その家の亭主はこれを拒み、ついに町人等が集まり来つて中間を打擲追出した。親樓日記天文八・八・三 天文十年十二月十三日、幕府は上下京に対し、地子の催促をしたにも拘らず、下京の町人は、幕府の沙汰に従わず、社寺本所の地子銭の納入を渋つて幕府をこまらせている。同天文十一・七・十四 三好長慶は、弘治二年、上京洛中洛外惣中宛に、地子銭の納入および牢人取締等を命じているが、

これは京中の納税及び治安を町の自治に委ねたものであり、この頃には、地子銭の取立も個別的ではなく、惣町の責任でおさめるようになったのではなからうか。

林屋氏も引用されるように京都の下京において、西組・長組・中組・巽組及び七町半組がはじめて史料の上に姿を現わすのは、法華一揆も終つた一五三七年天文六年正月のことであるといわれる。公同俗史

もとよりこれらの組の結成はそれより前にあるかと思われるが、この天文初年の法華一揆が京都における惣的結合の発展に、調期的な

意義をもつていたことは想像にかたくない。

奈良の場合、天文元年一向一揆は興福寺を攻めて、甚大な被害をあたえているが、この折、奈良の富人椿井町の橘屋主殿・藏屋兵衛・雁金屋民部等が六方衆の悪政を憎み、大いに一揆を助けたといわれる。増補同井家記 これをもつてすれば、宗旨こそちがえこのころになると、都市の住民がその自由を求めて、到るところで領主との戦いを展開していたことがわかる。都市の住民の実力はなお弱く、結局その反抗は失敗に終つたが、なおそれが都市における惣的結合発展の重要な契機となつたことは、都市の歴史においてもまた大きく評価せねばならぬ問題であらう。

三

この事情は、法華一揆を契機として起つた盲目法師の座の事件によつてもよく窺われる。

平家物語を彈ずる琵琶法師は、室町の頃京都に五・六百人を数え聖日録寛正三・三・三十、いつのころからか、当道座を組織し、久我家を本所としていた。ところが天文年間に至り、新座が起り、本座との間に猛烈な争がはじめられた。この紛争を記した「座中天文物語」は、天文九年三月、本座方の倫一檢校の作と伝えられており、本座側に有利に記されているが、そこに興味ある問題が含まれている。

本新阿座分裂の直接の原因は、天文三年、久我家が座中に對し、福一松村殿檢校の歸座を命じたところにある。座中はこれに對し、福

一の罪狀を逐一のべたててこれを拒否したので、久我家はこれを大いに怒り、当道座支配の論旨を申下し、この論旨に背くときは、惣檢校をも免職しようとまでおどかした。その論旨には、

当道旨目法師座中事、後白河院御宇以來御管領云々 弥不可有相違之由、天氣所候也、以此旨可令洩申給、仍言上如件、兼秀頼首謹言

天文三年十一月十六日

進上 左京權大夫殿

とあり、この現物は久我家にも残されている。しかし座側はあくまで久我家の支配權を否認し、久我家は、「光孝天皇以來その御忌の二月十六日、河原で積塔の儀をおこなう際、一万卷の心經の卷数を院の御所に取次ぎするだけの役であつて、本所とか、管領とかいうのは承認し難い」としてこれと争つた。こうしたことが続くうち、座衆の中には、総檢校の位をねらうものや、座の長老のやりかたに不満な若い法師たちが、ついに天文三年十二月七日より新座を組織した。その数は百五十餘人、追て同心するものをあわせて二百七十餘人にのぼった。本座においては、管領細川晴元より新儀の輩を停止する意味の命令をもらい、今更この命令を反古にすれば、衆中の

法度末代立ち難しとて、南御所を頼んで、反對運動をなした。

新座の輩は、さらに當時洛中に權柄をとつていた法華宗に属して、その勢をかつて本座を圧伏しようとし、夫婦子一人づつ廿一ヶ所の寺々へ手分をなして、師旦の契約をなした。そして法華僧をかたらい、伴のものを五人・十人づつ、相そえて、大津・山中其外の関所へ日々に番を出し、上下の当道法師を理不尽に引捕えた。本座方もこれに對抗して人を派遣するなど、争はやまなかつたが、新座方はようやくその番につかれ、日蓮宗の諸旦方中に設けられた衆会の衆に依頼して、本座方との間に協定を結んだ。その後も、積塔の儀について、兩座はしきりにその主導權を争つた。しかし天文五年、山門の法華一揆退治によつて、日蓮宗の徒が離散したため、新座の輩もまつたく凋落し、西國・八幡辺など方々に散在し、後に四条の道場に寄宿したが、ここにも入れられないという、悲惨な有様となつたという。

それにしても、当道座が武家の力を頼つて本所の意志を無視してまで独立の行動をとつたことは、公家勢力の減退を如実に示すものとして興味をひかれるが、さらに新座が、本座に對抗するため、天文の法華一揆を利用したことは、この法華一揆が、革新的な勢力の勃興にまたない機会をあたえるものであつたことを語っている。きつかけさえあれば、京都の商工業者は、古い權威をはなれて、新

座をたてようとしたのであり、法華一揆の支配していた当時、新座をたてようとするもの、さらに座そのものをも否定しようとする傾向が、到るところにあらわれていたことと想像される。

都市および農村における物的結合、それは古代的勢力との対決と排除の上に一層の地歩をかためることが、この天文法華乱前後における京都内外の事情を通して、まことによく知られるのである。

付記 本稿をなすにあたっては、辻善之助先生「日本仏教史中世篇」四・五、林屋辰三郎氏の「中世文化の基調」、原田伴彦氏の「日本封建都市研究」、村山修一氏の「日本都市生活の源流」、藤井学氏「仏教史学六ノ一、西国を中心とした室町期法華教団の発展」を参考にした点が少なくない。あわせ参照されることを望む。

執筆 者 紹 介

會 田 雄 次	京都大学助教授
梅 原 郁	京都大学大学院学生
寺 田 隆 信	京都大学大学院学生
豊 田 武	東北大学教授
藤 井 學	京都大学大学院学生
永 島 福 太 郎	関西学院大学助教授
矢 守 一 彦	名古屋大学助手
山 本 茂	京都大学大学院学生
岡 田 芳 三 郎	平安女子短期大学教授

This article presents an aspect of outlined history and contents of *Chên* (鎮) by the *Sung* dynasty, expecting to help our future systematic study of the relation between town and country.

On Cotton Merchants of Cities in the *Su* (蘇) and *Sung* (松) District

by

Takanobu Terada

In the delta plain around *Su-chou* (蘇州) down the *Ch'ang-chiang* (長江) river, the cotton industry has been widely developing since the “*Ming*” (明) dynasty, in which poor farmers took the most active part; many cities grown there were mainly commercial. This article realized the activities of these cotton merchants, especially the management of cotton-cloth dealers who seemed to be putting-out merchants, in connection with the character of “*Tzŭ-hao*” (字號) trading outside the *Ch'ang-mên* (閭門) in *Su-chou* (蘇州) which seemed to have the largest scale of cotton-wholesalers.

The Development of *Sô* (惣) Solidarity in Cities

—especially on the *Hokke* (法華) riot in the *Tenmon* (天文) era—

by

Takeshi Toyoda

The great riot of *Köln* in Germany in 1074 is known as the first commune-movement guided by the group of wealthy merchants. In order to establish commune cities had to repeatedly make terms with and struggle against the citylord. Also in Japan the sixteenth century was the period when such a riot was predominant in *Kyoto*, *Nara* or other places.

This article treats the *Hokke* (法華) riot mainly in *Kyoto* in the *Tenmon* (天文) era, explaining its process in pre-riot period and the rôle of *Machisyû* (町衆), expecting to be a material for studying the characteristic of the commune-movement in Japan.